

私立 東京女学館大学

プログラムの名称 卒業成長値を高める「10の底力」

プログラム担当者 国際教養学部 准教授・キャリア開発部長 加藤 千恵

キーワード 1. 「10の底力」 2. 卒業成長値 3. 少人数教育
4. オーダーメイドのキャリア教育 5. 学生満足度

1. 大学の概要

東京女学館は1888(明治21)年、「女子教育奨励会」(創立メンバー：伊藤博文、澁澤栄一、岩崎弥之助、外山正一等)により創設された、女子の一貫教育校である。以来、小・中高・大学において、「高い品性を備え、人と社会に貢献する女性の育成」を教育目標として掲げ、女性の自己実現を支援するとともに、グローバルな視野を備え、幅広く世界で活躍できるリーダーシップを持った女性の育成を目指している。

2002(平成14)年、東京女学館短期大学(国際文化学科・情報社会学科)で行われていた教育をより発展・充実させるため四年制大学に移行した。開設された国際教養学部では、コミュニケーション科目、国際関係科目、比較文化科目、ジェンダー科目、研究法科目などを中心にリベラルアーツ教育を実践している。2006(平成18)年には経済・経営科目、心理・社会科目を加え、より幅広い分野を網羅するようカリキュラム改訂を行った。

本学では、教育効果を高めるために、ほとんどすべての授業科目で少人数による対話型授業を行っている。2008(平成20)年度春学期開講科目の場合、約9割の授業が20人以下で行われており、徹底した少人数教育は学生や保証人に高く評価されている。

2. 本プログラムの概要

本プログラムの最大の特徴は、通常の授業において、その分野の専門的知識だけでなく、社会で必要とされる基礎力「10の底力」を身に付けることができる点にある。これは、少人数による対話型の授業形態と、授業担当者による教育方法の創意工夫によって実現できる。

学生たちのキャリア形成に必要な能力として設定された「10の底力」とは、①コミュニケーション能力、②プレゼンテーション能力、③ディスカッション能力、

④国際感覚・異文化理解能力、⑤外国語運用能力、⑥調査能力、⑦IT能力、⑧クリティカル思考、⑨コンセンサススキル(問題発見・提案・実行力)、⑩自己理解能力である(表1)。

本プログラム実施の流れは、以下の通りである。まず、すべての授業担当者(非常勤講師を含む)は、担当する授業において、どの「底力」を伸ばしていくかを考えながら授業を行い、Semester終了後に受講生一人一人について「底力」の成長度を評価する。一方学生は、それぞれの授業で身につく「底力」を参考に授業を選択し、Semester終了後に自己評価を行う。

教員による評価と学生自身の評価の合計点はSemesterごとに学生に提示され、学生は次期Semesterの履修計画の参考にする。合計点は成長値として加算され、4年後に「卒業成長値」(入学から卒業までに伸びた力)として本人に手渡される(図1)。

以上のように本プログラムは、一人一人が自分のキャリアを考え、必要な基礎力を伸ばしていくという点で、「オーダーメイドのキャリア教育」と言うことができる。本プログラムの運営に当たり重要なことは、学生の「10の底力」を高めるために必要なFD・SD体制の充実である。学力偏差値とは異なる、学生の隠れた能力や社会性を高めるために全学的な協力体制が不可欠なことは言うまでもない。

3. 本プログラムの趣旨・目的

(1) 新たな取組を実施するに至った動機・背景

21世紀を迎え働き続ける女性は増えているものの、採用や昇進、賃金における男女格差はいまだ大きい。根強い性役割意識、出産・子育て支援体制の不備など女性の自己実現を阻む要因があるなかで、自らのキャリアを切り開く力を身に付けることは一層求められるようになるであろう。

本学は教育目標の実現のために少人数による双方向型授業を実施し、外国語能力、幅広い教養、問題発

表1 「10の底力」のポイント

| | |
|---------------------------|---|
| ①コミュニケーション能力 | 相手の話を最後まで聞き要点をつかむことができる。相手の意見や気持ちを理解するために上手に質問することができる。異なる意見を持つ人に対して自分の意見や気持ちを上手に表現することができる。適度な顔つきやアイコンタクトなどボディランゲージを取り入れることができる。 |
| ②プレゼンテーション能力 | 自分の見解を明瞭に示す。論文を的確に要約したプレゼンテーションを行える。画像や動画、音声、イラスト、グラフを用いたプレゼンテーションを行える。調査データに基づく、もしくは第二言語によるプレゼンテーションを行える。プレゼンテーションを用いて公開の研究発表・政策提案を行える。 |
| ③ディスカッション能力 | テーマを理解している。相手の主張や論点を理解し、自分の意見を適切に説明できる。ディスカッションを円滑に進行させることができる。ディスカッションのための知識が十分にある。 |
| ④国際感覚・異文化理解能力 | 外国に対する地理的知識、歴史的知識や文化的摩擦に関する知識が十分にある。外国の実情や文化に関する情報収集能力が十分にある。異文化を理解する柔軟な思考ができる。 |
| ⑤外国語運用能力 | 外国語の情報を理解し概要や要点を捉え討論できる。非言語コミュニケーションを理解し状況や目的を考え適切に用いることができる。外国語の音声上の特徴や基礎的な文法事項などを理解し活用できる。外国語の文化的・歴史的・社会的背景を理解することができる。TOEFL、TOEICなど各種外国語能力試験で成績を上げることができる。 |
| ⑥調査能力 | 調査の基礎知識及び調査方法の基本を習得し、データの分析ができる。統計学の基本を習得し、量的なデータ解析・質的なデータ解析ができる。実際の調査分析を用いた報告書や論文を書くことができる。 |
| ⑦IT能力 | ITに必要とされる英語能力がある。コンピュータのハードやソフトを自分でセットアップできる。ワード、エクセル、パワーポイントを使いこなせる。ホームページの作成、管理ができる。 |
| ⑧クリティカル思考 | 物事をじっくり観察し、いろいろな原因を探ることができる。物事を多面的にとらえ、十分に情報を集めた上で結論を出すことができる。主観的に決めようとせず客観的に結論を出すことができる。他人から言われたことを鵜呑みにせず自分で判断することができる。 |
| ⑨コンセプチュアルスキル（問題発見・提案・実行力） | 与えられた課題を分析して問題点や複数の解決方法を見つけることができる。問題点を改善するための方法を提案することができる。課題を解決するための行動計画を立て実行に移すことができる。 |
| ⑩自己理解能力 | 自分の長所と短所を知っている。自分が好きなもの、嫌いなもの、得意なこと、苦手なことを知っている。どのような時に自分は、楽しい・嬉しい・悲しい・辛い気持ちになるか知っている。失敗したとき、不満や怒りを感じたとき、なぜそうなったのか理由を考えることができる。 |

見・解決能力を高める努力を続けてきた。数人から20人程度という小規模の授業形態は、教員と学生間のコミュニケーションを活発にし、学生自身が授業に貢献する機会を提供している。また、このような学生と教職員の心理的な距離が近いという小規模大学の利点を生かし、交換留学・短期留学、国内外でのインターンシップやボランティア活動を積極的に推進してきた。

更に、開学当初より「アドバイザー制度」を導入し、アドバイザーとなった教員は学生の修学・進学・就職・学生生活全般にわたって相談役となり、きめ細かい指導を行っている。

以上のような討論と対話を重視した双方向型授業、教職員による支援サービス等によって、学生たちは高いコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身に付けることができ、学生の進路選択や卒業後の

活動において役立てている。今後も引き続きこのような成果を上げていくために、目に見える形で能力の向上を学生に提示したいと考え、本プログラムを企画・立案するに至った。

(2) 本プログラムが目指すもの

本プログラムは、この少人数双方向型授業を利用した、学生一人一人のニーズにあったオーダーメイドのキャリア教育である。大学全体の教育目標（国際的な視野とリーダーシップ能力の育成）を、より具体的に表現した「10の底力」リストを基に、それぞれの学生が特に伸ばしたいと考えるものを選び、それを教員とキャリアカウンセラー等の職員が4年間かけて支援し、学生満足度の高い就職・進学を目指したキャリア教育を実現させる。

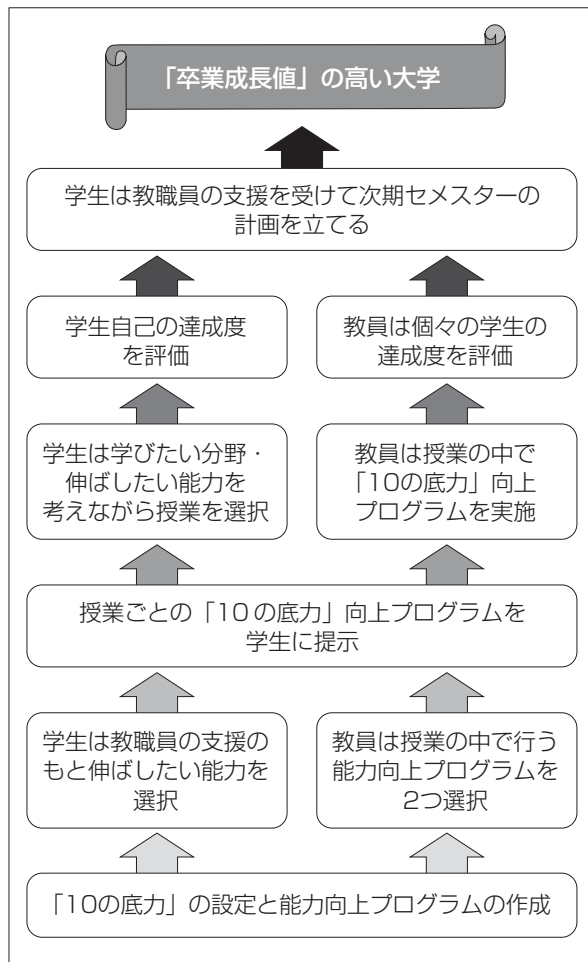


図1 全体の流れ

また、学力偏差値のみならず、「卒業成長値」を指標に、能力向上と成長の度合いを目に見える形で学生に提示していきたい。

4. 本プログラムの独自性(工夫されている内容)

(1) 「10の底力」の設定

本プログラムの独自性は、①設定された「10の底力」をどの授業で伸ばすことができるかが予め学生に提示されること、②伸ばしたい力を学生が選べること（オーダーメイド）、③「10の底力」が点数化され「卒業成長値」として手渡されること、である。

(2) 「10の底力」向上プログラムの実践

全教員は各自の担当授業において伸ばすことができる能力を2つ選び、学生に提示した上でその能力を伸ばすためのプログラムを実践する。授業担当者が創意工夫することで、学生は専門分野の知識に加え、「10の底力」を伸ばすことができる。

それぞれの「底力」についての実践例を紹介する。

①コミュニケーション能力を高める実践例

「体育」：二人組やグループ、チームでコミュニケーションをとりながら身体活動を行うことによってコミュニケーション能力の向上を目指す。(その他「情報基礎演習」「総合英語」「日本語文演習」「人間形成と教育」等)



写真1 コミュニケーション能力を高める

②プレゼンテーション能力を高める実践例

「米文学概論」：発表担当者は発表内容についてプランを立て教員と打合せをしながら準備する。他の学生はプレゼンテーションを評価、自分の発表に役立てる。(その他「インターンシップ実習」「経営戦略論」「地域研究(ヨーロッパ)」「比較文化論」等)



写真2 プレゼンテーション能力を高める

③ディスカッション能力を高める実践例

「ボランティア活動と政策」：毎回文献担当を決め、担当者はレジュメ作成と全体の司会を行う。小グループの討論発表、レジュメ発表、全体討論を進める。(その他「中国語」「ハングル」「情報社会論」「家族とジェンダー」等)



写真3 ディスカッション能力を高める

④国際感覚・異文化理解能力を高める実践例

「文化人類学」：様々な文化における家族システム、教育システム、儀式とライフサイクル、民族の多様性について学ぶ。(その他「哲学」「国際関係論」「文化摩擦」「英文学概論」等)

⑤外国語運用能力を高める実践例

「比較国際教育」：毎回の授業においてアメリカの教育問題に関する英文文献を用い、英語の読み書き能力の向上を図る。英文読解の予習は成績評価の4割。(その他「環境社会学」「地域社会論」「国際開発」等)

⑥調査能力を高める実践例

「地域研究(中東・イスラム圏)」：書籍、新聞、雑誌、TVニュース、大使館資料、諸機関紙、各国外務省HP等の媒体を活用して調査能力を高める。(その他「統計処理法演習」「心理学研究法」「経済政策」「宗教学」等)

⑦IT能力を高める実践例

「国際情報論」：世界のインターネット利用状況を分析し、各地域の情報格差や問題点を理解した上で、国レベルのIT戦略を考えIT能力を向上させる。(その他「マルチメディア論」「心理学実験」「情報ネットワーク論」等)

⑧クリティカル思考を高める実践例

「言語学」：アメリカの教育現場での言語政策、少数民族の言語などのテーマに関し、できるだけ異なる立場、時には対立する意見や理論を提示して考えさせる。(その他「ベンチャービジネス論」「リーダーシップとジェンダー」「生命の科学」「日本文化史」等)

⑨コンセプチュアルスキル(問題発見・提案・実行力)を高める実践例

「経営戦略論」：経済誌などに掲載された企業の記事を用いてケーススタディを行う。問題の選定、その企業の優れている点、改善点、弱点を討議する。(その他「人材育成論」「日本の伝統文化」「民俗学」等)

⑩自己理解能力を高める実践例

「社会心理学」：日常生活に関連した具体例を紹介し、テーマごとに自分自身の体験に基づいた事例を答えさせ、自己理解を深める課題(応諾を得る方法、不協和を低減する方法など)を設定する。(その他「日本語文演習」「学習心理学」「発達心理学」等)

(3)「10の底力」評価

セメスター終了時には全受講生にそれぞれの能力がどの程度伸びたかについて、2(身についた)、1(やや身についた)、0(身につけていない)による自己評価をさせるとともに、授業担当教員も2、1、0で学生の到達度を評価する(図2)。その結果を見ながら学生は、教員・キャリアカウンセラー等の職員とともに次はどの能力を向上させたらよいかについて検討する。教職員と学生が一体となりキャリア教育の充実、卒業成長値の把握、学生満足度の向上への寄与について考えることによって、学生のニーズに合ったキャリア開発支援の一層の充実が期待できる。

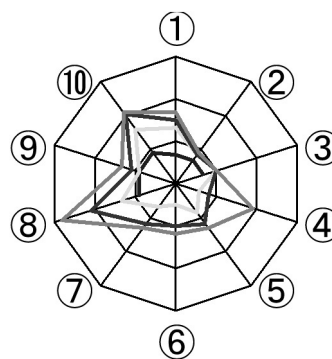


図2 学生に提示されるセメスターごとに加算された「卒業成長値」の例(①~⑩は「底力」の番号に対応)

5. 本プログラムの有効性(効果)

このプログラムを通じて期待される効果の第一点は、学生自身が自分の能力・適性を早い段階で把握できることである。現代は若者のコミュニケーション能

力低下が指摘され、企業においても新卒社員に対する支援体制、コミュニケーション能力向上に腐心する時代である。大学時代に自己理解能力を高め、目指す方向を見つける努力をし、キャリアをデザインする基礎力を身に付けることは、現在の社会及び学生のニーズに合致していると考えられる。学生一人一人が自分の能力・適性について考える環境を与えられることにより、各自の伸ばすべき能力を発見する。それは将来のキャリア形成に必ず役立つであろう。

第二点は、教員のティーチングスキルが向上することである。教員は授業において自身の専門分野に関する授業を行うが、その際「10の底力」向上プログラムを導入するため、効果的な教育方法について勉強し、実践的な能力を高める必要がある。これをFDと連動させ、教員の資質向上を図っていく。また年度毎に、「10の底力」から複数の力を選び、それらが高めるための教育方法を学ぶ。研究活動については、「10の底力」を高めることによって教員自身の研究力も向上し、コンセプチュアルスキル、クリティカル思考などの能力を向上させることにより、教員自身の研究活動に役立つことが期待される。

第三点は、キャンパスにおいて学生と接する大学職員も、日常業務のなかで自分の「10の底力」が向上するよう意識するため、学生支援サービス全体の質が向上することである。

6. 本プログラムの改善・評価

(1) 試験的な取組からわかったこと

本プログラムを始めるに当たり、2007(平成19)年度秋semesterを利用して試験的に運用を試みた。学生には、履修した授業で身に付くとされる「底力」が2から3提示され、授業終了時に、教員による評価と学生による自己評価が行われた。

この試験的運用によって本プログラムの基本的な進め方に問題がないことを確認することができた。その際、学生たちが授業を受けることで身に付く「底力」が具体的に表されることに期待と意欲を持って臨んだことは予想以上の効果であった。

改善点として、①学生が理解しやすいように「底力」の段階表示方法を簡略化すること、②専任教員の担当科目だけでは学生による得点に偏りが生じるため対象を非常勤講師の担当科目にも広げること、③学生一人一人のデータ作成・管理を簡略化すること、が明らかになった。特に③については専門業者との協力による

プログラムソフトの開発が必要不可欠である。

(2) 本プログラムへの評価

今後の評価体制については、現在本学が学生支援サービスに関して行っている授業評価アンケート調査、学生生活アンケート調査、進路意識調査、保証人アンケート調査と関連づけることが必要である。これらの調査は集計・分析ののち項目によっては回答や改善策を付けて学生や保証人に提示しており、本プログラム導入後についても上記調査の中に「10の底力」評価制度を取り入れ、調査・分析・改善に取り組んでいく。

さらに第三者による評価として他大学教職員及び企業関係者から成る外部評価委員会制度の導入、他大学の実践事例に関する実地調査を行う。依頼先は、実践的なキャリア教育を推進する大学、「社会人基礎力」向上に取り組む大学、及びそこでプログラムを運営する教職員などである。

評価の視点は、「10の底力」向上のためのプログラムが各授業で実践されているか、学生個別のニーズを吸い上げているか、能力向上プログラムによって学生が成果(卒業成長値)を実感しているかである。年度ごとの評価結果は学内外に公表する。評価結果の活用方法については、「10の底力」の効果を表した冊子の作成、カンファレンスの開催等を計画している。

7. 本プログラムの実現可能性・将来性

卒業成長値を高める「10の底力」プログラムは、キャリア開発委員会・キャリア開発室の下で管理運営を行っていく。授業運営を担当する教務委員会、アドバイザー制度を担当する学生委員会、及び教員の教育・研究能力の開発に携わるFD委員会との連携でプログラムを実施する。一方、プログラムの評価については、学内では自己点検評価委員会に、また、学外では他大学関係者と企業関係者からなる外部評価委員会に、支援を要請する。卒業成長値を高める「10の底力」プログラムの年次計画は次の通りである。

2008(平成20)年度

初年次はプログラムを実践する支援体制を整える。①学生のプレゼンテーション能力、調査能力、IT能力、外国語運用能力向上のためのPC及び周辺機器の購入、②学生のコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を高める方法を学ぶための教員対象の研修会の開催、③学生のコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を高める



写真4 学生のコミュニケーション能力を伸ばすための教育方法を学ぶ (FD研修)

方法を学ぶためのセミナーへの教職員の参加、④他大学への実地調査と外部評価の準備、⑤評点結果の集計・分析用ソフトウェアの開発。

2009(平成21)年度

2年目は非常勤講師担当の授業科目も対象にする。①「10の底力」向上のための非常勤講師対象の研修会の開催、②学生のディスカッション能力向上のための研修会の開催、③学生のディスカッション能力を高める方法を学ぶためのセミナーへの教職員の参加、④「10の底力」向上のための能

力を高める職員対象の研修会の開催、⑤他大学への実地調査と外部評価の実施。

2010(平成22)年度

3年目は卒業成長値の算出準備をする。①学生の国際感覚・異文化理解能力・外国語能力向上のための専任・非常勤講師対象の研修会の開催、セミナーへの参加、②「10の底力」向上のための職員対象の研修会の開催、③他大学への実地調査と外部評価の実施、④卒業成長値の算出準備。

2011(平成23)年度

4年目は「10の底力」プログラムを完成させ、学生に卒業成長値を提示する。①学生の調査能力・クリティカル思考を高めるための専任・非常勤講師対象の研修会の開催、セミナーへの参加、②「10の底力」向上のための職員対象の研修会の開催、③他大学への実地調査と外部評価の実施、④卒業成長値の算出と提示、⑤報告書作成。

補助期間終了後の2012(平成24)年度以降も1～4年生が「10の底力」向上プログラムの対象となっており、卒業までの成長値を上げる取組を引き続き行っていく。

選 定 理 由

東京女学館大学においては、その教育目標「国際的な視野とリーダーシップ能力を身につけた女性の育成」の実現のために、少人数による双方向型授業を実施して学生に高いコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身に付けさせ、修学支援の成果を上げていけると言えます。

また、今回申請のあった「卒業成長値を高める『10の底力』」の取組は、「10の底力向上プログラム」を導入して個々の学生の就職・進学支援を充実させることを目的としたものです。このプログラムでは、それぞれの学生が「10の底力」リスト(コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力、国際感覚・異文化理解能力等)の中から特に伸ばしたい項目を選び、それに合致する授業を受講することによって個々の底力の育成が可能となるよう企画されています。

この取組は、個々の学生を対象にしたオーダメイド型のキャリア教育支援であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。